

Minerva Access is the Institutional Repository of The University of Melbourne

Author/s:

Maree, C;Takagi, C;Okano, K;Iwasaki, S;Tanaka, L;Nakane, I

Title:

Speech Styles in longitudinal interviews with women from the Kobe area--language changes and life stage (継続的インタビューデータにみる神戸出身女性話者のスピーチスタイル——ことばの経年変化とライフステージ——)

Date:

2019

Citation:

Maree, C., Takagi, C., Okano, K., Iwasaki, S., Tanaka, L. & Nakane, I. (2019). Speech Styles in longitudinal interviews with women from the Kobe area--language changes and life stage (継続的インタビューデータにみる神戸出身女性話者のスピーチスタイル——ことばの経年変化とライフステージ——) . Studies in Dialect (方言研究) , 5, pp.267-293

Persistent Link:

<https://hdl.handle.net/11343/276970>

Changes in a Kobe woman's speech styles across life stages: Longitudinal interviews 1989-2016.

Chie Takagi^a, Kaori Okano^b, Shimako Iwasaki^c,
Lidia Tanaka^b, Ikuko Nakane^d and Claire Maree^d

^aOsaka University, ^bLa Trobe University, ^cMonash University, ^dMelbourne University

Abstract

This paper examines grammatical variations over time by a female Kobe dialect speaker, Kanako (pseudonym) through quantitative analyses of longitudinal ethnographic interview data accumulated from 1989 to 2016. The data, involving the same participants who met regularly over 27 years, reveals that Kanako uses different variants in relation to her changing social situations. This paper demonstrates that a person's social status prompts them to use variations of grammar in relation to their life stage.

We focus on grammatical variants related to politeness and formality. Kobe dialect has several markers for politeness, such as verbal suffix *-(i)mas-*, copular *=des-*, tag question *=desjoo*, and response tokens *hai* 'yes.POL' and *iiē/ie* 'no.POL'. The explanation markers also have a contrast between polite and non-polite. *=N=des-* is polite and *=nen/-(i)ten*, *=N(=ja)* and *=no* function non-polite. Three subordinating clitics *=kara*, *=nde* and *=node* are other indicators to measure the formality in speech. Furthermore, *=node* and *=nde* clauses are relatively more formal than *=kara* since they require polite forms in the main clause.

As a result, we found that Kanako chose different variants according to her age. While she used non-polite forms between 1989 (age 18) and 2000 (age 29), she drastically changed to polite forms in 2006 (age 35). Then she mixed both polite and non-polite forms in 2010 (age 39) and 2016 (age 44) while shifting between Kobe dialect and standard Japanese. Language use is related to transformations in social life, and we conclude that a person's social status strongly influences the choice of the grammatical variants.

Keywords: panel study, age-graded variations, life stage, speech styles, formality, Kobe dialect

縦断的インタビューデータにみる

神戸出身女性話者のスピーチスタイル

——ことばの経年変化とライフステージ——

高木 千恵・岡野 かおり・岩崎 志真子・

田中 リディア・中根 育子・マリィ クレア*

要旨：本研究の目的は、1989年から2016年にかけて行われた神戸出身女性話者に対する縦断的なインタビューデータを資料として、彼女らの話しことばの経年変化を明らかにすることにある。本稿では調査協力者の一人であるカナコ（仮名）を対象に、18歳から45歳の間に収録された6件の資料を用いて彼女のスピーチスタイルの変遷を探った。それぞれのデータにみられる対者待遇表現、確認要求表現、応答詞、原因・理由の接続助詞のバリエーションを分析した結果、18歳からの27年間におけるカナコのスピーチスタイルは、カジュアルからフォーマルへ、神戸方言的なものから非神戸方言的なものへと変化していた。このような結果とカナコのライフステージの変遷に一致がみられることから、本稿では、ライフステージごとに異なるカナコの社会的ネットワーク、ならびに社会的な立場に対する自己把握のあり方がそれぞれのスピーチスタイルに反映されていると結論づけた。

キーワード：パネル調査、ことばの経年変化、ライフステージ、スピーチスタイル、フォーマリティ、神戸方言

* Maree, Claire

1. はじめに

本研究は、1989 年から継続的に行っている神戸出身女性話者に対するインタビューデータを資料として、彼女達の話しことばがどのような経年変化を辿っているかを明らかにすることを目的としている。本稿では 21 名の調査協力者のうちの 1 名（カナコ・仮名）に焦点を絞り、18 歳（1989 年）から 45 歳（2016 年）までの 27 年間における彼女のスピーチスタイルの変遷について、ライフステージの変化と関連づけて捉えることを試みる。

本稿の構成は次のとおりである。まず 2 節において、ライフステージとことばの関わりを扱った研究を先行研究としてとりあげる。続く 3 節で本研究の概要を示し、本稿で扱うデータを説明する。4 節で分析項目と分析の方法について述べ、個々の言語項目の分析結果を 5 節で扱う。6 節ではカナコのスピーチスタイルの変容をライフステージの変化や社会的ネットワークと関連づけつつ考察する。7 節でまとめと今後の課題を述べる。

2. ことばの経年変化とライフステージ

本研究の主たる目的は、神戸出身女性話者の 18 歳から現在に至るまでのことばの変容を捉えることにある。言語形成期を過ぎてからのことばの変容は、言語接触やライフステージの変化と関わっている。これらは、話し手を取りまく環境や話し手の社会的な立場の変化をもたらすものである。

ライフステージは生活周期の各段階を指す社会学の用語である。濱嶋朗ほか編（1997）では、個人の場合は「幼年期・児童期・青年期・中年期・高年期」などに、家族については「新婚期・育児期・教育期・子独立期・子独立後夫婦期・老夫婦期・単身期」などに分けられるとしている¹。尾崎喜光（2001）はことばの世代差の中に「世代間での活動の領域や様式等に異なりがあるために生じる」（p. 86）ものがあると指摘し、特定の世代にふさわしいとされる表現を「ライフステージ語」と呼んでいる。具体的な例として、男性の使用する自称詞の世代差、育児語使用の世代差、丁寧語に終助詞の「なあ」が後続する「おじさん言葉」などが挙げられている。また井上史雄ほか（2016: 172-175）はライフステージに対応する具体的な場面として「家庭」「地域」「学校」「職場」を挙げ、敬語の習得が成人後に行われること（敬語の成人後採用）を

この4場面と関連づけて論じている。

ライフステージの変化は話し手の構築する社会的ネットワークの変化をもたらす。たとえば入学や卒業によって新しい交友関係が生まれ、それが話し手のことばの運用や規範意識に影響を与えることは想像に難くない。国立国語研究所(1982: 450-451)は社会人の敬語運用のあり方と職種に関連について、現場系の従業員に比べると事務系従業員のほうが、また工場・営業所の従業員よりも本社機構の従業員のほうがことばづかいに気を配る度合いが高いと指摘している。同様に井上史雄ほか(2016: 186-189)も、愛知県岡崎市における経年調査の結果から労務系よりも事務系・接客系に従事する人のほうがことばづかいが丁寧であると述べている。これは、彼ら・彼女らの有する社会的ネットワークの違いを反映しているものと考えられる。

本稿でとりあげるカナコの場合、18歳からの27年間には高校卒業、就職(→退職)、結婚、出産、離婚といったイベントによるライフステージの変化がある(3.2節参照)。また結婚によって居住地を移動しているほか、家業(漁業)の手伝い、フルタイムのケアワーカー、パート勤めなど、その時々で異なる仕事に従事してもいる。本稿の関心は、ライフステージの変化とこれに伴う社会的ネットワークの変化が話しことばにどのように反映されているかという点にある。そのことに迫るため、まずはカナコのスピーチスタイルの実態を記述し、その上で、彼女のスピーチスタイルの変容やその背景について考えてみたい。

3. 本研究の概要と本稿で扱うデータの詳細

3.1 研究の背景とインタビューデータ

本稿で扱う談話資料は、筆者の一人(岡野)が21名の調査協力者に対して実施したインタビューデータの一部である。岡野は「日本の高校生が卒業後の進路決定をどのように行うか、どのようなことが進路決定に影響力をもつのかを明らかにする」という目的のもと、兵庫県神戸市内の二つの公立高校において1989年4月から翌年3月までの1年間の参与観察を実施し、進路が決まった直後の9月頃、高校3年生の男女約100名に対して個別インタビューを行った²。インタビューは、自身の進路決定に何がもっとも関与的であ

った（と本人達が捉えている）かを引き出すために、キーワードを書いたカードを示しながら岡野が質問をして協力者がそれに答えるという形で進められた。ただし関連事項については協力者達が自由に語っており、半構造化インタビューに近いスタイルとなっている。2 回目のインタビューは協力者達が卒業して 2 年後の 1992 年に行われ、卒業後から現在までの生活の変化や現在従事している仕事の内容、あるいは家庭の状況などが岡野への近況報告として語られている。以後、インタビューはほぼ 3 年おきに実施され現在に至っている³。

本稿が対象とする 6 件のデータの収録年および録音時間数は表 1 のとおりである。2000 年収録分のみ、180 分のうち前半の 85 分を分析対象とした。これは録音後半にカナコの家族が帰宅し、会話に加わっているためである。1989 年分と 1992 年分が他と比べるとやや短いが、本稿で扱う分析項目については十分な量の用例が得られたと考えている。

表 1 データ収録年と録音時間数

収録年	1989	1992	2000	2006	2010	2016
録音時間数	42 分	55 分	180 分 (85 分*)	92 分	90 分	75 分

(*は分析に使用した時間数)

3.2 話者情報と話者のライフステージ

21 名の調査協力者からカナコを対象としたのは、27 年間のライフコースに結婚や出産といったイベントによって区切られるライフステージが複数あり、かつ、各ステージとことばの対応が比較的に見えやすいケースであったことによる。以下、3.2.1 でカナコのライフヒストリーを簡単に述べ、3.2.2 で、6 件の収録データについての彼女のライフステージからみた分類を示す。

3.2.1 カナコのライフヒストリー

カナコは 1971 年香川県生まれで、警備員の父親の仕事の都合で関西や九州の各地に居住した後、小学校入学（6 歳）から結婚（19 歳）までを神戸市で過ごした。言語形成期が神戸市在住期間とほぼ重なることから本研究では

彼女を「神戸出身女性話者」と位置づける⁴。6人姉妹の長女として、病気がちの母親に代わって幼い妹たちの面倒を小学生の頃からよくみていたという。高校卒業後は真珠加工の会社に就職したが数ヶ月後に退職し結婚、神戸から近隣のX市に住まいを移し、1990年（19歳）に女兒を出産した。その後神戸の西側にあるY市に移り住み、第二子・第三子を出産、3人の子供を育てるかたわら漁師の夫とともに舅や義兄らと漁業に携わる。ただし漁におけるカナコの仕事は完全に無償であり個人的な収入を得ることは困難であった。2003年（32歳）の離婚を機に単身で神戸へ戻り、高齢者や障がい者のための社会福祉サービスを行う会社でケアワーカーとしての職を得る。熱心な仕事ぶりが認められ、2006年（35歳）にはパートタイムの介護ヘルパーをとりまとめるコーディネーターに抜擢される。2007年（36歳）に職場の同僚と再婚、同年に女兒を出産し、翌年には再婚相手の故郷である広島県東部（備後方言域）の地方都市Z市へ転居した。転居は夫の両親の希望であったという。カナコは主婦として子育てをしつつ高齢者向けデイサービス施設でパート勤めをし、2010年（39歳）に男児を出産、2014年（43歳）には「長男の嫁」として夫の両親との敷地内同居を始めた。2016年（45歳）当時は工場でパート勤めをし、子供のために定期的に県外の大学病院へも通院していたが、趣味の教室に参加する余裕もできつつあった。

3.2.2 インタビュー当時のカナコのライフステージ

表2 インタビュー当時のカナコのライフステージ

データ 収録年	年齢	カナコの状況	職務	居住地	ライフ ステージ
1989	18	高校3年生。6人姉妹の長女。	高校生	神戸市	【1】
1992	21	主婦、漁師の妻。一児の母。	労務系 (無償)	Y市	
2000	29	主婦、漁師の妻。三児の母。	〃	〃	
2006	35	独身。経済的に自立。 勤務先でコーディネーターに就任。	接客系 (フルタイム)	神戸市	【3】
2010	39	主婦。長男の嫁。二児の母。 パート勤務（デイサービス施設）。	接客系 (パート)	広島県 Z市	【4】
2016	45	主婦。長男の嫁。二児の母。 パート勤務（工場）。夫の両親と敷地内同居。 県外の大学病院に定期的に通院。	労務系 (パート)	〃	

ゴシック体は各ライフステージの特徴を表す。

ライフステージという観点からは、カナコの6件のデータを四つに分けることができる(表2)。すなわち、【1】社会に出る前の高校生の時期、【2】結婚し兵庫県Y市で子育てをしながら漁業に携わる時期、【3】離婚後、神戸に戻って経済的に自立する時期、【4】再婚して広島県Z市に移り住み、主婦としてパート勤務をしながら子育てをする時期である。ライフステージとことばの関連については6節で考察する。

3.3 インタビュアーについて

インタビュアーは1989年当初から一貫して岡野である。岡野は調査協力者のカナコ達より一回り年上で広島県東部出身、備後方言を母方言とする。高校での1年間の参与観察の際、担当教師は生徒達に岡野のことを「ニュージーランドの大学院生で日本の高校の就職指導について研究してる人、でもその前は向こうの高校の先生やった人」と紹介し、学校生活をともにする中で生徒達は岡野を「先生」や「岡野さん」と呼ぶようになった(Okano 1993)。「先生」という呼称からは「高校教師と生徒」に準じた関係性が想像されるが、高校3年当時のカナコの岡野に対する話し方はかなりカジュアルなものである(5節参照)。海外の大学院生から大学教員になるなど経年調査の間に岡野自身にも変化があったが、同性であること、子を持つ親であること、職業人であることなどから親近感が生まれ、社会や家庭における協力者達の経験を共有できる存在となりえたように思われる。

4. 分析の観点と分析の方法

本研究ではスピーチスタイルを測る指標として、フォーマリティとリージョナリティ(regionalism, 以下「地域性」とする)に注目する。フォーマリティは、カジュアルとフォーマルを両極とし、〈丁寧さ〉⁵に関わる形式や文体差のあることばのバリエーションの選択によって表されると考える。また地域性(の有無)は、地域方言と標準語とを両極にもち、方言形と標準語形の選択によって表されるものである⁶。本稿では、カナコの使用する言語形式の量的な分析によって全体を把握し、その上で個別の現象について検討する。とりあげるのは①対者待遇形式、②推量表現・確認要求表現、③応答詞、④

原因・理由の接続助詞である。①②③が〈丁寧さ〉に関わるもの、④が文体差に関わるものである⁷。これらの項目を選んだのは、カナコのスピーチスタイルの変遷の中でフォーマリティの変化が顕著であったことによる⁸。また①では、カジュアルなバリエーションに地域性のあるものとそうでないものが現れたため、分析の際はこの点にも注目した。以下、具体的な形式と分析方法について、①②③と④に分けて説明する。

4.1 〈丁寧さ〉に関わる項目について

〈丁寧さ〉に関わる具体的な形式をまとめたのが表3である。分析にあたって、まずは①対者待遇形式として〈丁寧〉を担う対者敬語のデス(=des-)・マス(-*(i)mas-*)に注目し、主節ならびにデス・マスの生起する従属節における述語の形式を量的に分析した。表3に示すとおり、対者敬語およびこれと対立する〈非丁寧〉の形式は述語の品詞ごとに異なるが、本稿ではこれらを〈丁寧〉と〈非丁寧〉に大別する。得られた用例を主節と従属節に分けて分析するのは、バリエーションの中に主節・従属節のいずれかにしか現れないものがあるためである。たとえば名詞・形容動詞述語の〈非丁寧〉の一つナ(=na)は原因・理由の接続助詞ノデ・ンデが後続するときの形式であり、〈丁寧〉〈非丁寧〉の対立する環境では従属節にのみ生起する。また逆にゼロ形式(ϕ)や説明のモダリティ形式ノ・ンなどは主節にしか出現しない。

表3 〈丁寧さ〉に関わる分析項目①②③と具体的な形式

		〈丁寧〉	〈非丁寧〉
①対者待遇形式	a) 名詞・形容動詞述語	=des-	=na, =da, =ja, (ϕ)
	b) 形容詞述語	=des-	(ϕ)
	c) 動詞述語	-(i)mas-	(ϕ)
	d) 説明のモダリティ	=N=des-	=N=da, =N=ja, =nen/-(i)ten =no, =N
②推量・確認要求表現		=desjoo	=jaro
③応答詞	肯定	hai	un
	否定	ii, ie	uun

凡例 =: 接語境界, -: 接辞境界, (ϕ): ゼロ形式

次に②推量・確認要求表現について、関西では〈非丁寧〉のヤロに対してデショーが〈丁寧〉の確認要求的表現として機能することから、推量表現とともにその用例を収集した⁹。また③応答詞は肯定のハイとウン、否定のイーエ・イエとウーンを対象とした。それぞれハイとイーエ・イエが〈丁寧〉、ウンとウーンが〈非丁寧〉の応答詞である。肯定の応答詞はあいづちや自己確認の表現としても使われるが、本稿ではそのような例も併せて分析対象とした。

4.2 文体差に関わる項目について

表4は、カナコの使用する原因・理由の接続助詞とその文体差をまとめたものである。カラ、ンデ、ノデはいずれも前接する述語形式の〈丁寧さ〉には制約がないが、ノデ・ンデについては主節に〈非丁寧〉が生起しないという制限がある。したがって(1a)(1b)に示すとおり、ノデやンデを用いた場合に主節に〈非丁寧〉が来ることは不自然となる。一方カラにはその制限がなく、(1c)のとおり〈丁寧〉〈非丁寧〉の両方を主節にとることができる。

- (1) a. ちょっと用事あるノデわたし {帰りますね／??帰るな}。
- b. ちょっと用事あるンデわたし {帰りますね／??帰るな}。
- c. ちょっと用事あるカラわたし {帰りますね／帰るな}。(作例)

したがって(2)に示すように、ノデ・ンデによる中途終了発話では主節における〈丁寧〉形式の存在が含意されることになる。一方カラはこの点についてはニュートラルな接続助詞である。

表4 ④原因・理由の接続助詞の文体差

	主節の述語形式	
	〈丁寧〉	〈非丁寧〉
ノデ (=node)	○	×
ンデ (=nde)	○	×
カラ (=kara)	○	○

凡例 = : 接語境界, ○ : 生起可, × : 生起不可

- (2) a. ちょっと用事あるノデ…。 →主節〈丁寧〉
 b. ちょっと用事あるンデ…。 →主節〈丁寧〉
 c. ちょっと用事あるカラ…。 →主節〈丁寧／非丁寧〉

このことから、(少なくとも関西の方言においては) ノデ・ンデとカラには文体差があるということができ、原因・理由の接続助詞の使用状況はカナコのスピーチスタイルのフォーマリティを測る指標になりうると考えられる。

なお用例収集にあたって引用発話はすべて除外し、岡野に直接向けられた発話のみを対象とした。また次の (3) ～ (5) に挙げるような述語のテ形¹⁰や引用のッテ・ミタイナによる言いさし表現も扱っていない。

- (3) =で製図は: もう今の授業でもついてかれへんのに仕事でやり始めたたぶん気い狂うなと思って= (1989/KAN/219)¹¹

- (4) だから, (.) 結局は: うん. やっぱ〈A 社〉がいいなって. (1989/KAN/30)

- (5) うん. でまあ真珠の: 選別とかぐらいやったらまやったことあるしできるやろ:みたいな. (1989/KAN/221)

カナコの発話にはこのような言いさし表現も少なくなく、とくに 1989 年のデータに顕著であった。中途終了発話の多用によって〈丁寧さ〉の選択を回避しているとすれば待遇行動上の戦略の一つとしても注目されるところであるが、この点については別稿に譲りたい。

5. カナコのスピーチスタイルの変遷

5.1 対者敬語の使用

表 5・図 1 は主節における対者待遇形式の使用状況を示したものである。対者敬語の使用率という観点から、カナコのデータは 2000 年までの前半と 2006 年以降の後半に分けることができる。図 1 にみるように、1989 年 (18 歳)・1992 年 (21 歳) における対者敬語の使用は皆無であり、2000 年 (29 歳) でもわずかに 1.5% (5 例) みられるのみである。岡野のことを「先生」と呼んではいるものの、かなりくだけたスピーチスタイルであることがわかる。

2000 年のデータにおける 5 例の対者敬語は次のようなものであった。(6) の「いただきます」は定型表現とも分析できるが、残りの 4 例ではいずれも

表5 ①-1 主節における対者待遇形式の使用状況（用例数は実数）

調査年	1989	1992	2000	2006	2010	2016
a) 名・形動= <i>des</i> -			1	65	27	122
b) 形= <i>des</i> -				24	8	35
c) 動-(<i>i</i>) <i>mas</i> -			1	54	23	94
d) $\neg$ <i>n</i> = <i>des</i> -			3	33	13	80
〈丁寧〉合計	0	0	5	176	71	331
a) 名・形動= <i>da</i>						2
名・形動= <i>ja</i>	7	11	20	9	4	4
名・形動= ϕ	92	65	176	79	162	131
b) 形= ϕ	21	27	24	19	27	9
c) 動= ϕ	40	23	64	16	59	19
d) $\neg$ <i>no</i>	2		5	3	10	2
$\neg$ <i>n</i> = <i>da</i>				1	1	
$\neg$ <i>n</i> (= <i>ja</i>)	3		2		1	
$\neg$ <i>nen</i> /-(<i>i</i>) <i>ten</i>	28	30	42	5	3	
〈非丁寧〉合計	193	156	333	133	267	167

凡例 名：名詞，形動：形容動詞，形：形容詞，動：動詞，=：接語境界，-：接辞境界， ϕ ：ゼロ形式

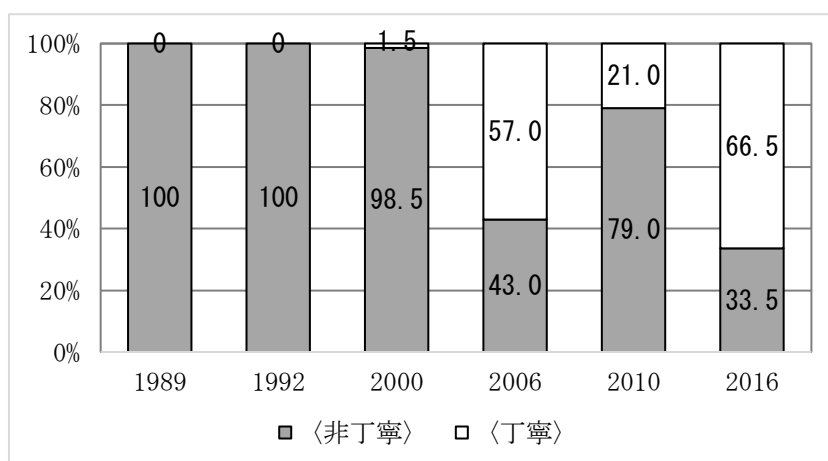


図1 ①-1 主節における対者待遇形式の使用率 (%)

岡野に新規情報を提供する場面でンデスやデスを使用している。

(6) あたしもちょっといただきま::す。《お菓子の袋を開ける音》

(2000/KAN/387)

(7) 《海で獲る貝の種類を説明して》ほ一本みるは黒い貝やねん. で, え:
と白みるってゆって白い方の貝があるんですよ. (2000/KAN/410)

(8) 《収入についての説明》

614 KAN うん(.)で大体こうやって(.)いろいろ(...)売り上げがこれだけあったら(.)消費税これだけとこれはプラスの分ね

- 消費税は-売ってうちらが消費税をいただく分で(.)合計
して手数料引いて
- 615 KO でこれをこれから全部-(0.3)足した分が
- 616 KAN うん, んで最終-最終的な儲けがこの金額になんねんね
- 617 KO それだけ銀行に入るわけよ.
- 618 KAN ううん, 取りに行くの. (0.5)
- 619 KO あ:ほんと.
- 620 KAN うん. 毎回-毎週毎週:[取りに行く(ん)=
- 621 KO [ふ::::ん
- 622 KAN =で通帳だから持って:,
- 623 KO うん
- 624 KAN 組合に取りに行っ[て:,
- 625 KO [うん.
- 626 KAN うん. (0.3)するんです. (2000/KAN/614-626)
- (9) 結婚して(.)だから(.)え:と 29 日に(.)え:と(.)旦那連中がみんな
とば:つと飲みに行ってる間に(.)女連中はここで忘年会しよう::っ
て(.)また鍋するんですよ hhhhhh (2000/KAN/958)
- (10) 《岡野にトイレの場所を教えている》あ(.)はいはいはい(.)あうん,
そこつきあたりです(.)あ(.)そう(.)電気つく(.)うん
(2000/KAN/1089)

対者敬語の有無という点だけでみると、高校3年生から29歳までの11年間のカナコの話し方はほとんど変わっていないように見える。しかし実際には、例(8)の616行目にあるような説明のモダリティ形式ネン・テンに終助詞ネが生起したネンネ・テンネという表現が多用されるなど、2000年のデータにはそれ以前とは異なる特徴も見受けられる¹²。表5にはネン・テンの内訳を示していないが、1989年と1992年に1例ずつ、2000年には計20例のネンネ・テンネが使用されていた。

2006年(35歳)になるとカナコのスピーチスタイルは劇的な変化を遂げ、対者敬語の使用が半数以上を占めている。2010年(39歳)にはまたその割合が下がるが、2016年(45歳)には全体の3分の2近くが対者敬語で占められるに至っている。今回は分析対象としていないが、2016年には尊敬語や謙譲の授受表現などそれ以前にほぼみられなかった素材待遇形式も使用されており、カナコのフォーマル志向が窺える。

表 6 ①-2 従属節における対者待遇形式の使用状況（用例数は実数）

調査年	1989	1992	2000	2006	2010	2016
a) 名・形動= <i>des</i> -				2	3	1
b) 形= <i>des</i> -				5		7
c) 動-(<i>i</i>) <i>mas</i> -				29	2	4
d) $\neg$ <i>n</i> = <i>des</i> -				15	12	
〈丁寧〉合計	0	0	0	51	17	12
a) 名・形動= <i>na</i>		1	1	12	17	24
名・形動= <i>da</i>					1	9
名・形動= <i>ja</i>	16	32	34	4	9	9
b) 形= ϕ	23	18	13	22	30	35
c) 動= ϕ	41	64	77	35	64	77
d) $\neg$ <i>n</i> = <i>da</i>				1	8	3
$\neg$ <i>n</i> = <i>ja</i>		2	7	6	14	2
$\neg$ <i>nen</i> /-(<i>i</i>) <i>tev</i>	8	38	48	1	3	
〈非丁寧〉合計	88	155	180	82	146	159

凡例 名：名詞，形動：形容動詞，形：形容詞，動：動詞，=：接語境界，-：接辞境界， ϕ ：ゼロ形式

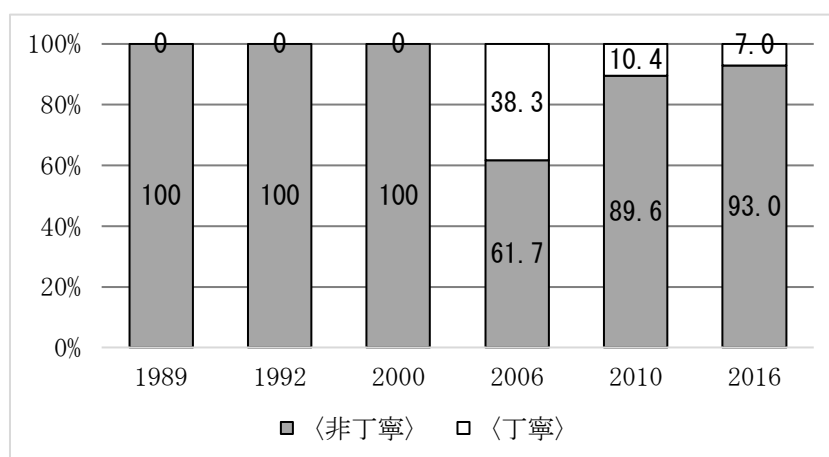


図 2 ①-2 従属節における対者待遇形式の使用率 (%)

ところで，従属節における対者敬語の使用実態は主節におけるそれとはやや傾向が異なる（表 6・図 2）。従属節では 2006 年における対者敬語の使用率の高さが目立ち，2016 年は 2010 年と同程度の（低い）使用率である。これは，それぞれの談話に現れた接続助詞の量的な違いに起因するものである。2006 年の談話でよく用いられた接続助詞の上位 3 位を挙げると，ンデ 47 例（うち対者敬語に接続したもの 3 例），ケド 44 例（同 31 例），シ 26 例（同 10 例）であった。一方 2016 年における上位 3 位は，ノデ 79 例，ンデ 56 例，シ 13 例で，このうちノデの 1 例のほかはすべて〈非丁寧〉に後続していた。つ

まり、2006 年のデータにおける従属節内の対者敬語の使用率を押し上げていたのはケド節の多用であったということになる。標準語では接続助詞によって対者敬語の生起率が異なることが指摘されているが（三尾砂 1942 など）、同様のことが神戸方言にもあるものと思われる。

5.2 説明のモダリティ形式にみる「脱・神戸方言化」

図 3 は主節における説明のモダリティ形式の使用状況を割合で示したものである（実数は表 5 を参照）。

2006 年以降の三つのデータにンデスという対者敬語のついた形式が多用されていることは先にみた結果と一致しているが、ここで注目したいのは、関西の方言の代表的な形式ともいえるネン (=nen)・テン (- (i)ten) が 2016 年に一例も使用されていない点である。比較のカジュアルな話し方をしている 2010 年のデータにおいてさえ 10.7% (3 例) しかなく、代わってノが多数を占めている (35.7%)。すなわち、同じ〈非丁寧〉が多く使われているといっても、2010 年の「カジュアル」は 2000 年までとはずいぶん異なるということになる。用例はわずかであるが、表 5・6 で断定辞のダが 2006 年以降に

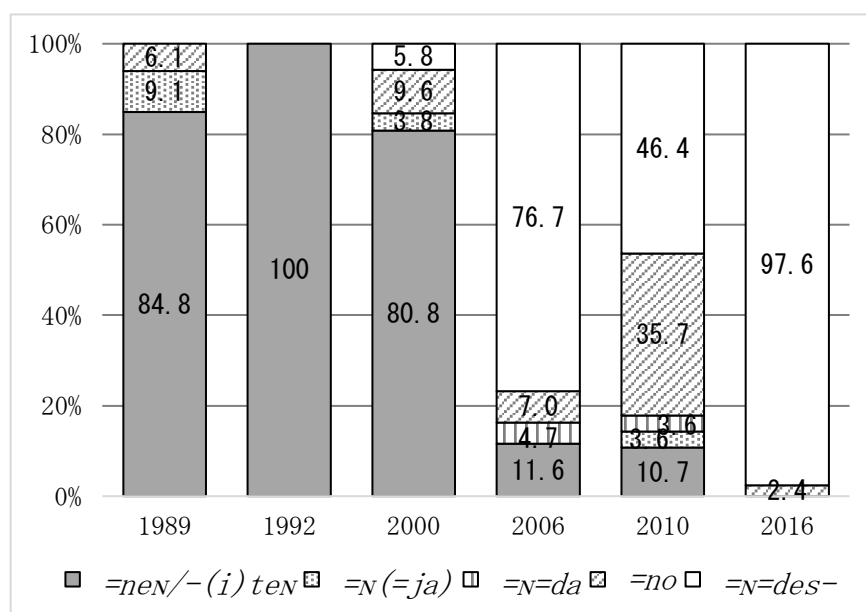


図 3 説明のモダリティ形式の使用率 (%)

出現している点も注目される。ネン・テンの不使用やダの使用はカナコの「脱・神戸方言」志向の現れとみることができる。

5.3 推量表現・確認要求表現

表7に示すとおり、確認要求表現にはデショーのみが用いられ、〈非丁寧〉のヤロは一例もみられなかった。推量表現としてヤロが使われていることは対照的な結果である。以下にデショーの用例を挙げる。

(11) 《親の干渉について》

- 968 KAN だから普通のね?(.) 普通の家やったら(.)なんて言うん
(.) 普通こーいっぱいきょうだいとかおったら:
969 KO うん.
→970 KAN もう結構もほったらかしって感じで[しよ:].
971 KO [なる]ね::, 6 人も
いるとね::
→972 KAN なるでしよ::. うちの家は違うねん. (1989/KAN/968-972)

カナコの発音では多くが「デショー」のように尻上がりのイントネーションによって実現されていた。4 節でも述べたとおり、関西におけるデショーはヤロと対をなす丁寧な表現であり、10 代の親しい友人同士の会話であればまず使われないものである。したがって、岡野に対するデショーの使用は目上の相手への配慮の現れと考えられる。なお、推量表現に〈丁寧〉のデショーが出現するのは 2006 年に入ってからで、他のデス・マス形式の出現時期と軌を一にしている。また丁寧さとは関わらない部分であるが、2010 年に 2 例、2016 年に 1 例ダローが使われていることも注目される。これは先ほど述べたダの使用と同様の傾向である。

表7 ②推量・確認要求表現（用例数は実数）

調査年		1989	1992	2000	2006	2010	2016
②-1 推量	=des.joo				7		8
	=daro					2	1
	=jaro	2	4	6	3	10	2
②-2 確認要求	=des.joo	22	14	9	4	8	1

凡例 =: 接語境界

5.4 応答詞の使用

応答詞の使用状況は表 8 のとおりであった。表 8 をみると、ハイ・イーエといった〈丁寧〉の形式が 2016 年に 20 例とやや目立つものの、それ以前には〈非丁寧〉の形式がおもに使用されている。5.1 節で指摘したとおり、2006 年や 2016 年には対者敬語が多用されていたが、ここでも応答詞はウン・ウーンが多数を占めている。述語部分に〈丁寧〉の形式を使用しつつ応答詞に〈非丁寧〉を使用することによって、聞き手を遠ざけすぎないように配慮しているのではないかと思われる。

5.5 原因・理由の接続助詞の推移

原因・理由の接続助詞はこの 27 年の間にカラ→ンデ→ノデとシフトしている（表 9・図 4）。中心的に使用される形式がカラからンデに変わるのは 2006 年（35 歳）で、述語に対者敬語が多用される時期と重なっている。先に図 2 でみたように、2010 年（39 歳）には再び対者敬語の使用が少なくなっていたが、この時期に使われる接続助詞はカラよりもンデが多い（38.2%＜60.7%）。さらに 2016 年（45 歳）になるとンデよりもノデが多く使われるようになっており（38.1%＜53.7%）、ことばに対するつよいフォーマル志向がみてとれる。

表 8 ③応答詞の使用状況（用例数は実数）

調査年	1989	1992	2000	2006	2010	2016
ハイ・イーエ			3	2		20
ウン・ウーン	192	196	371	488	421	596

表 9 ④原因・理由の接続助詞の使用状況（用例数は実数）

調査年	1989	1992	2000	2006	2010	2016
ノデ					1	79
ンデ		1	5	47	54	56
カラ	45	68	93	15	34	12

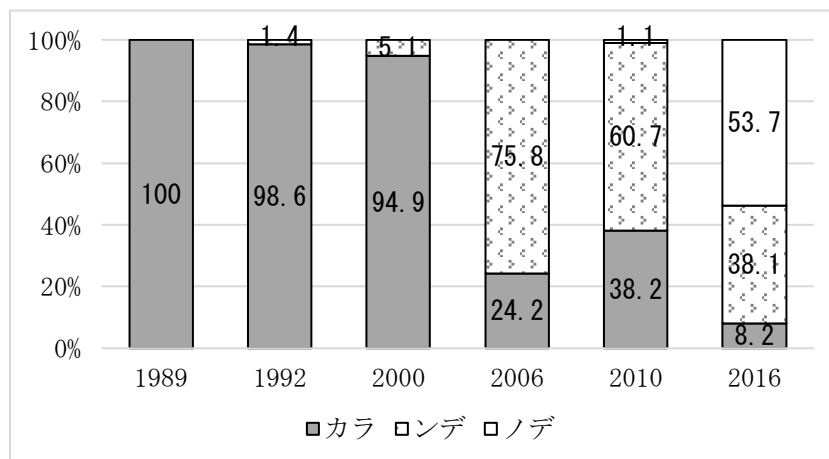


図4 原因・理由の接続助詞の使用率 (%)

6. カナコのライフステージとことばの変容

6.1 カナコのことばの変容

前節で、四つの言語項目におけるカナコの使用形式の変遷を概観した。それぞれの結果を、スピーチのフォーマリティと地域性を示すものに分けて整理したものが表10である。表中、①～④では各項目において〈丁寧〉またはノデ・ンデの占める割合を、(i)では主節のノダ相当形式においてネン・テンの占める割合を百分率と実数でそれぞれ示した。各セルの上段が百分率(小数第3位以下切り捨て)、下段()内が実数である。ネン・テンとの比較のため、(ii) (iii) (iv) (v) にはノ、ダ、ンダ、ダローの使用状況を示した。全体の用例数が25例に満たない項目は百分率ではなく記号によって用例の存在を記した。◎は当該形式のみが使用されていることを、♪は他の形式と併用されていることを表す。用例がない箇所は空欄にしてある。

表10から、フォーマリティについては、1989年から2000年までをカジュアルスタイルとして一つのグループにすることができる。この時期はデショーのほかには対者敬語がほぼ使用されておらず、接続助詞でもカラが中心的な形式である。これに対して2006年から2016年は、相対的に対者敬語の使用割合が高く、接続助詞でもンデ・ノデが選択されていることから、フォーマルスタイルへとシフトしている。ただし主節のすべての述語に対者敬語が使われているわけではなく、対者敬語使用率のもっとも高い2016年でも〈非丁寧〉の述語形式が34%程度使われている。カナコの使用する「フォーマル

表 10 丁寧形式・あらたまり形式・方言形式の推移（数字は使用率・％，（ ）内は実数）

調査年	1989	1992	2000	2006	2010	2016
①-1 主節〈丁寧〉			1.47 (5/338)	56.95 (176/309)	21.00 (71/338)	66.46 (331/498)
②-1 推量〈丁寧〉				♪ (7/10)		♪ (8/11)
②-2 確認要求〈丁寧〉	◎ (22)	◎ (14)	◎ (9)	◎ (4)	◎ (8)	◎ (1)
③応答詞〈丁寧〉			0.80 (3/374)	0.40 (2/490)		3.24 (20/616)
④-1 接続助詞ノデ					1.12 (1/89)	56.11 (78/139)
④-2 接続助詞ンデ		1.44 (1/69)	5.10 (5/98)	77.04 (47/61)	60.67 (54/89)	40.28 (56/139)
フォーマリティ	■	■	■	□	■□	◇
(i) ネン・テン（主節）	84.84 (28/33)	100 (30/30)	80.76 (42/52)	11.62 (5/43)	10.71 (3/28)	
(ii) ノ	6.06 (2/33)		9.61 (5/52)	6.97 (3/43)	35.70 (10/28)	2.43 (2/82)
(iii) ダ（主節・従属節）					♪ (1/14)	♪ (11/24)
(iv) ンダ（主節・従属節）				♪ (4/10)	♪ (9/24)	♪ (3/5)
(v) ダロー					♪ (1/6)	♪ (1/3)
地域性	★	★	★	★	☆	☆

凡例 ◎：当該形式のみを使用，♪：他形式と併用

■：カジュアル，□：フォーマル（ンデ多用），◇：フォーマル（ノデ多用）

★：神戸方言的，☆：脱・神戸方言的

スタイル」は、〈丁寧〉と〈非丁寧〉の述語形式が混在したものなのである。

なお、2010 年は主節における対者敬語の使用が少ない（21.00%）という点で相対的にはカジュアルスタイルともいえるが、原因・理由の接続助詞としてカラではなくンデが多用されている（60.67%）点が注目される。3 節で述べたように、対者敬語がなくともンデによって文体の高さが示されるため、2000 年以前のスタイルと比べると全体としてはやはりフォーマルに寄っているといえる。2016 年に至ってはノデの使用が半数以上を占めていること、カラがほとんど使用されていないことから、6 件のデータの中でもっともフォーマル志向のつよい時期といえることができる。

ネン・テンの使用に関しては、一見すると 2000 年（80.76%）と 2006 年（11.62%）に境界があるようにみえるが、これは主節の述語形式が〈丁寧〉ベ

ースへとシフトしたことに起因するものである（5.2 節参照）。むしろ注目すべきは 2010 年で、〈非丁寧〉ベースでありながら 2000 年以前のようなネン・テンの使用がみられず（10.71%）、代わってノの使用が目立つようになっている（35.7%）。ダの使用が目立ちはじめるのも同じ頃である。したがって地域性の観点からは 1989 年から 2006 年までが一つのグループであり、2010 年以降に脱・神戸方言化が顕在化したといえよう。これはカナコが神戸を離れて広島県 Z 市へ移り住んだことと関連があるものと思われるが、移住先の方言形式であるジャの使用がみられないことから、脱・神戸方言化が移住先方言の受容（備後方言化）とは別物であることがわかる。

6.2 ライフステージの変化とことばの変容の関係

3 節でカナコのライフステージが四つに区分できることをみたが（表 2）、彼女のことばについてフォーマリティと地域性という観点から整理すると、安定的にカジュアルスピーチが用いられている 1989 年から 2000 年、フォーマルスピーチへのシフトが明確な 2006 年、カジュアルとフォーマルが混在しカジュアルスピーチであっても脱神戸方言的な傾向がみられる 2010 年、強いフォーマル志向が窺える 2016 年、とまとめられる（6.1 節）。ここから、カナコのライフステージと社会的ネットワーク、そしてことばの関係は表 11 のようになる。表のとおり、【1】高校生当時と【2】漁師の妻になってからとでカナコのことばに違いがみられない¹³。井上史雄ほか（2016）は学校（高校）を敬語習得の場としつつ、教師に対して生徒が対者敬語を使わないケースがあることも指摘しているが、1989 年当時のカナコもインタビューでは（デショーを除いて）岡野に対して対者敬語を使っていない。また 1992 年・2000 年は夫の生業である漁業に携わっていた時期で、当時のカナコは夫の家族・親戚や近隣の漁業関係者を中心とする狭く緊密なネットワークを構築していたと考えられる。カナコは夫と子供達とだけで暮らしていたが、漁業においては夫の父親や叔父・叔母とともに日々働いていた。またカナコの居住していた地域には漁業関係者が多く、彼らもみな家族単位で漁業を営んでいたため、家族内・家族間の結びつきが強かった。職場と生活の場とがほぼ重なっているので、子供を介してのネットワークも職場や生活の場のそれと

表11 カナコのライフステージとスピーチスタイル

データ 収録年	年 齢	ライフステージ	社会的ネットワーク	ことば	
1989	18	【1】 高校生。6人姉妹の長女	・学校生活（友人，先輩後輩，教師） ・家庭（両親，妹5人）	■	★
1992	21	【2】 主婦，漁師の妻。母親。	・子育て（家庭内） ・夫の両親，親戚 ・漁業関係者（家族，夫の親戚中心）		
2000	29	〃	・子育て（保育園，小学校，習い事） ・夫の両親，親戚 ・漁業関係者（家族，夫の親戚中心）		
2006	35	【3】 経済的に自立	・ケア施設の上司，同僚，部下 ・施設利用者やその家族	□	★
2010	39	【4】 広島県 Y 市在住。 主婦，長男の嫁。母親。 パート勤務	・子育て（家庭内） ・夫の両親，親戚 ・職場（訪問介護） ・通院（県外の大学病院）	■□	☆
2016	45	〃	・子育て（小学校） ・夫の両親，親戚 ・職場（工場） ・通院（県外の大学病院） ・趣味の教室	◇	☆

凡例 ■：カジュアル，□：フォーマル（ノデ多用），◇：フォーマル（ノデ多用）

★：神戸方言的，☆：脱・神戸方言的

大きくは変わらないものであった。主婦になったカナコが岡野に対者敬語を使用しないのは、彼女の日常の中にそのような場がなかったためと思われる。

社会的ネットワークとことばの関わりは【3】の時期にも現れている。離婚後、経済的に自立し社会福祉施設でフルタイムのケアワーカーとして働くようになったカナコは、職場の上司や同僚だけでなく施設の利用者やその家族とも日常的な接触をもつようになる。また恒常的な接触だけでなく、一時的な接触、初対面の人への対応なども頻繁に起こっていたことが想像される。ここでは、Y 市に住んでいた頃と違って生活の場と職場とが明確に切り分けられていただけでなく、職場にあっても、上司・同僚・部下といった職場内部のネットワークと、施設利用者やその家族、あるいは行政の担当部署といった対外的なネットワークが存在した。このように社会的なネットワークが重層的になったことが、岡野に対する対者敬語の使用につながったのだと考えられる。事務や接客に携わる人の方が労務従事者よりも敬語使用率が高いという国立国語研究所（1982）や井上史雄ほか（2016）の指摘ともカナコのスピーチスタイルは一致している。加えて、職場での努力が認められたカナ

コは 2006 年にはコーディネーターを任されるようになっていたが、責任ある立場に置かれたことも彼女の言語運用に影響を与えたものと思われる。

なお、【4】の時期にある脱神戸方言化の要因として広島県への移住が挙げられるが、2016 年にみられるフォーマリティの高さはそれだけでは説明できないだろう。大学病院への通院や夫の両親との敷地内同居など、新たな環境がもたらす社会的ネットワークが影響を与えている可能性が考えられる。たとえばこの時期顕著にみられる尊敬語や謙譲語の使用は、定期的な通院によって生まれた県外の大学病院関係者とのつながりが関わっているのではないと思われる。また備後方言の尊敬語であるテヤ敬語が出現したのもこの時期で、これは夫の両親との敷地内同居がもたらした地元の人達とのネットワークが誘因したものとみることができる。本稿で扱わなかったこれらの項目についても、詳しくみていく必要がある。

6.3 カナコの社会的立場とスピーチスタイル

ここまで、インタビューデータにみられたカナコのスピーチスタイルに変容がみられたこと、そしてその変容がその時々におけるカナコの社会的ネットワークの違いと関連していることをみた。調査開始時から一貫して岡野がインタビューをしているにもかかわらずこのような結果が得られたことを、どのように解釈すべきだろうか。

岡野の観察では、高校時代のカナコは岡野に対してのみならず教員と話すときは常にカジュアルスタイルであったが、一方で部活動の先輩に対しては必ず対者敬語を使用していた。したがって 1989 年時点においてすでに、カナコのレパートリーにはその年齢なりのフォーマルスタイルが存在していたといえる。ただし高校生のカナコには、岡野や教員はそれを使用する相手とみなされていなかったのである。主婦になってからも、カナコにとって岡野はやはりカジュアルスタイルで対応する相手であった。しかし離婚後の 2006 年に岡野のインタビューを受けたとき、カナコは岡野をフォーマルスタイルを使うべき相手と捉え、以前とは大きく異なるスタイルで対応するに至ったのである。

このようなスタイルのシフトには、カナコの自己把握、および他者把握の

あり方が関わっていると思われる。すなわち、その時々の自分について、高校生である、(若い)主婦である、経済的に自立した30代の大人である、といった把握をし、そのような自分が一回り年上の女性である岡野に対して使うべきスタイルを選び取った結果が、ここまでみてきたようなスタイルの変容を生じさせたと考えられるのである。したがって、ライフステージと社会的ネットワーク、ならびに話し手のスピーチスタイルの変容は次のように考えることができる。すなわち、ライフステージが話し手の社会的ネットワークのあり方に関与し、社会的ネットワークによって話し手の社会的な自己把握が行われる。その上で、自身と話し相手との関係にふさわしいスタイル選択がなされる、ということである。

7. まとめと今後の課題

本稿では、神戸出身女性話者カナコのインタビューデータを用いて18歳から45歳までの27年間における彼女のスピーチスタイルの変容を記述し、ライフステージとの関わりからその変容を考察した。そして、ライフステージごとのカナコの社会的ネットワークの違いがそれぞれのインタビュー談話におけるスピーチスタイルに反映されていると結論づけた。また、インタビュー談話のスピーチスタイルは日常的によく使用するものを単にあてはめたものではなく、その時々における自己の社会的な立場にふさわしいスタイルを選び取った結果とみるべきであることを指摘した。本稿の目的はある程度達成されたといえるが、以下のような課題が残されている。

まず、談話内のバリエーションの使い分けなど、ミクロレベルの分析である。データでは〈丁寧〉〈非丁寧〉の各形式が同じ談話の中に観察されるが、話題の内容や話題に対する話し手・聞き手のスタンスがそれぞれの使い分けに関与している可能性がある。また本稿ではスピーチスタイルのフォーマリティに絞って分析項目を選定したため、地域性については説明のモダリティ形式と断定辞からしかみることができなかった。否定辞やアスペクト形式、終助詞など、地域的なバリエーションをもつ言語項目をさらに詳しく検討しなければならない。さらに、移住による言語接触に起因することばの変容については、備後方言の尊敬語であるテヤ敬語の使用や、京阪式アクセントか

ら東京式アクセントへの揺れなど興味深い現象がみられるが、これについても本稿では扱うことができなかった。

ライフステージごとに変わる社会的なネットワークとこれによる自己把握の変容については、今後も検討していく必要がある。今回はカナコのライフヒストリーに沿ってスピーチスタイルの変容の解釈を試みたが、同様のことが他の協力者にもあてはまるかどうか、検証していきたい。

また今回はカナコだけに注目したが、この 27 年の間には岡野自身にもライフステージの変容があった。互いの変化によってもたらされる関係性の変化がカナコの言語選択に関与しているとも考えられるため、こうした点からの分析も必要である。いずれも今後の課題としたい。

付記

本研究はオーストラリア政府の研究助成を受けたものである／This research was funded by the Australian Government through the Australian Research Council.

注

- 1 濱嶋らの記述の背景には伝統的な家族観があると思われるが、現実社会における「家族」の形態は多様であり、すべての共同体が同じライフステージを共有するわけではない。
- 2 この調査にもとづく社会人類学的な研究成果は Okano (1993) としてまとめられている。
- 3 1989 年から 2001 年にかけて行ったフィールドワーク（インタビューを含む）の成果については、エスノグラフィックなアプローチによる 21 人の分析を行い Okano (2009) としてまとめた。同書にはカナコを含む 8 人の協力者のライフヒストリーも収められている。また筆者らは現在、このデータの言語学的な分析のための研究プロジェクトを立ち上げ、オーストラリア政府の助成金を得て研究を遂行している。本プロジェクトの研究成果の一つにカナコの 1989 年と 2000 年のデータを多角的に分析した Maree and Okano (eds.) (2018) がある。本稿でも必要に応じて同書の分析について触れる。
- 4 注 3 で述べた Maree and Okano (eds.) (2018) にも、神戸方言の特徴とされるアスペクト表現トー $-(i)too < -(i)tor-u$ をカナコが使用しているという指摘がある。
- 5 ここでの〈丁寧さ〉は、〈丁寧〉と〈非丁寧〉の対立をもつ文法カテゴリを指す。
- 6 ここで「両極」と述べたように、フォーマルーカジュアル、標準語ー方言という区別は二

律背反的ではなく連続的なものと考えているが、これには地域差もあると思われる。また地域によっては、対者敬語を用いることと方言的でなくなることが同義でフォーマリティと地域性の二つの軸を立てる必要のないケースもあるだろう。

- 7 対者待遇形式や応答詞は話し相手との社会的な上下関係によって選択されるが、原因・理由の接続助詞はそうではないため、本稿では①～③と④を区別する。
- 8 否定辞やアスペクト形式など地域性を測る指標となりうる言語項目があるが、分析項目の検討段階でその多くが対者敬語の使用・不使用と連動して選択されていることが窺えた。このため本稿では、全体像の把握のためにもフォーマリティの推移をみる必要があると考えた。
- 9 確認要求的表現としてはほかに〈非丁寧〉のヤン・ヤンカ、ヤンナ・ヨナ、〈丁寧〉のジャナイデスカ、マスヨネ・デスヨネが使われているが、本稿では分析対象外とした。
- 10 南不二男（1993）が指摘するとおり、理由節などテ形による従属節が対者敬語と共起する場合もあるが、カナコのデータに対者敬語によるテ形は1例もみられなかった。
- 11 インタビューデータから得られた発話例を示す際は、末尾に（収録年/話者 ID/発話番号）の情報を示す。話者 ID のKANはカナコ、K0は筆者（岡野）である。なお、本稿で用いる文字化の細則は次のとおりである；（.）（…）（数字） ポーズの長さ／〔 〕 発話の重なり／（ ） 聞き取り困難な部分／《 》 状況説明／. 下降イントネーション／？ 上昇イントネーション／、 継続イントネーション／： 音の引きのばし／- 音の途切れ／= 発話間の切れ目のない部分／hhh 笑い／〈 〉 個人情報など内容を伏せた部分。
- 12 この点についてはMaree and Okano (eds.) (2018) にも指摘がある。
- 13 ただし終助詞ネの多用など他の言語項目には違いもある（Maree and Okano (eds.) 2018 による。本稿 5.1 節も参照）。高校時代と漁師の妻になってからのカナコのスピーチスタイルの違いは、フォーマリティとはまた別のところにあると考えられる。

引用文献

- 井上史雄・阿部貴人・鎌水兼貴・柳村裕・丁美貞（2016）『敬語表現の成人後採用—岡崎における半世紀の変化—』東京：国立国語研究所。
- 尾崎喜光（2001）「日本語の世代差はなくなるか」『言語』30-1.
- 国立国語研究所（1982）『国立国語研究所報告 73 企業の中の敬語』東京：三省堂。
- 濱嶋朗・竹内郁朗・石川晃弘編（1997）『社会学小辞典 [新版]』東京：有斐閣。

- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 東京: 大修館書店.
- 三尾砂 (1942) 『話言葉の文法 (言葉遣篇)』 (東京: くろしお出版から復刊, 1995) .
- Maree, C. and K. Okano. (eds.) 2018. *Discourse, Gender and Shifting Identities in Japan: The Longitudinal Study of Kobe Women's Ethnographic Interviews 1989-2019, Phase One*. London/New York: Routledge.
- Okano, K. 1993. *School to work transition in Japan: An ethnographic study*. Clevedon, Avon: Multilingual Matters.
- Okano, K. 2009. *Young women in Japan: Transitions to adulthood*. London: Routledge.

(たかぎ・ちえ 大阪大学大学院准教授)

(おかの・かおり ラトローブ大学教授)

(いわさき・しまこ モナシュ大学 Lecturer)

(たなか・りでいあ ラトローブ大学 Honorary Associate)

(なかね・いくこ メルボルン大学 Senior Lecturer)

(まりい・くれあ メルボルン大学 Senior Lecturer)